

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月15日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320078

研究課題名（和文） 敏感期以降における日本人英語学習者の、冠詞、時制の獲得に関する理論的・実証的研究

研究課題名（英文） **Theoretical and empirical research on the acquisition of English article use and tense by Japanese learners after the sensitive period**

研究代表者

遊佐 典昭（YUSA NORIAKI）

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：40182670

研究成果の概要（和文）：

(1) 第二言語の熟達度における個人差を、脳活動の変化としてとらえることが可能である。(2) 敏感期以降の日本人英語学習者でも、統語論においては経験以上の知識を得ることが可能であり、外国語環境でも母語で機能する生物学的制約が機能している。(3) 統語論の基本原則（構造依存性）に関しては、敏感期以降でも機能する。(4) 冠詞、時制の誤りはランダムではなく体系性があり、普遍文法と素性の再構成という観点から、原理的な説明が可能である。(5) 明示的教授は少なくとも、言語運用面においては効果がある。(6) 本研究の結果は、学習文法の改善に役立つ。

研究成果の概要（英文）：

This study provides the behavioral and neuroimaging data to show that (1) two distinct regions of the left frontal gyrus explain individual differences in second language (L2) proficiency; (2) post-puberty Japanese learners of English can acquire more knowledge of syntax than is instructed, suggesting the interweaving of nature (universal principles of human language) and nurture (instruction) in L2 acquisition; (3) at least the core principle (i.e., structure-dependence) in the computational system still functions after the critical or sensitive periods, suggesting plasticity for neural circuits for language in adult L2 learners; (4) the acquisition of article use and tense can be explained in a principled way by the Feature Reassembly Hypothesis; (5) explicit instruction can improve at the very least the performance of L2 learners; (6) results here provide useful insights into the pedagogical grammar of English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
総計	9,500,000	2,850,000	12,350,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：日本人英語学習者、冠詞、時制、刺激の貧困、普遍文法、fMRI、敏感期、構造依存性

1. 研究開始当初の背景

第二言語獲得(SLA)研究は、生成文法誕生とほぼ同時期に本格的に始まったが、言語理論の精緻化と母語(L1)獲得研究の蓄積のなか、1990年

代に入り、検証可能な実質的仮説を提示できる段階に到った。さらに、高次脳機能研究や、非侵襲的脳イメージング技術の発展により、生きた人間の言語処理に關与する脳機能をとらえ

ることが可能となり、言語理論で仮定した理論構築物（たとえば、統語構造）を間接的にはあるが、検証できるようになった。この結果、SLAが脳科学の研究対象となり、自然諸科学との有機的連携を深めながら広大な新領域を形成してきた。研究代表者は、生成文法の枠組みに基づくSLA研究の重要性をとらえ、生物言語学としてのSLA研究の必要性を説いてきた（遊佐2005, 2010）。

SLAには、相反する二つの問題がある。一つは、L1獲得同様に、経験から帰納できないほど豊かな言語知識を第二言語(L2)使用者が獲得する「SLAにおけるプラトンの問題」、あるいは「SLAにおける刺激の貧困の問題」であり、1990年代から現在に至るまでオフラインの行動実験がなされてきている。2000年代にはいると、L2を使用する際の脳活動に関心が集まったが、脳科学の観点から、教授以上の知識をL2使用者が獲得可能であることを脳科学から示したデータは存在しなかった。

人間は言語表現を形成するときに、単語を直列的に並べるのではなく、無意識的に要素を階層構造にまとめあげていくことが明らかになってきている。人間言語は、線状性、つまり語順ではなく、抽象的な階層性に依存している。この意味で、人間言語は「構造依存性」という基本的特質を有している。レキシコンから選んだ語彙項目を、順次併合することで階層性を有する統語構造を作り、この構造を脳内の意味解釈と音声解釈システムに送り出すのが、統語演算（シンタクス）である。この統語演算の研究は、人間言語やそれを司る脳を理解する上で不可欠なものであり、人間の認知能力の研究でも重要な領域である。この統語構造に作用する「構造依存性の原理」は、普遍文法(Universal Grammar, UG)を構成する原理であり、母語(L1)を対象とした多くの研究がなされてきた。しかし、SLAにおけるUGの利用可能性に関しては、心理行動実験に限定されており、脳科学からの本格的な研究は行われていなかった。

二つ目は、「SLAにおけるオーウェルの問題」である。これは、主に統語部門に見られるプラトンの問題の反対で、豊富な言語経験にもかかわらず、SLAではなぜ限られた知識しか得られないのかという問題で、冠詞や時制のSLAはその典型例で、主に屈折形態論部門に見られる。この現象は、SLAの初期段階だけではなく、英語環境に長期間生活をして見られる現象である。この問題自体は、L1の転移(transfer)の研究以来長い歴史があるが、「インターフェイス仮説」(=統語部門と談話・語用論部門の外部インターフェイスに関する言語現象は、言語処理や言語以外の認知能力に負荷をかけ獲得が困難であること)が検証可能な仮説として国外で活発な研究が行われている。インターフェイス仮説は、SLA研究に言語処理研究が不可欠であることを示した点で大きな貢献をしているが、研究対象

が目標言語を日常生活で使用するL2環境であり、我が国のような英語を教室で外国語として学ぶ(English as a foreign language, EFL)環境の研究を扱っていない。

2. 研究の目的

本研究は、感受性期・敏感期(sensitive period)を超えた日本人英語使用者を対象として、生成文法理論と実証的研究(心理行動実験、脳機能イメージング研究)が連携することで、言語知識、言語処理のメカニズムを解明することを目的とした。具体的には、(1) EFLの定着には、英語の学習開始年齢だけでは説明ができず、英語接触量が重要であるのかどうかを探る。(2) L2の熟達度(到達度)における個人差を、定量的に測定可能かどうかを探る。(3)自然言語の特徴である「構造依存性の原理(principle of structure-dependence)」が、SLAでも利用可能かどうかを探る。(4) L2使用者が経験以上の言語知識を得ることが可能かを脳科学の観点から探る。(5) 冠詞獲得に関する問題点を探り、教授効果を探る。(6) 時制獲得に関する問題点を探る。(7) 研究成果を、発信することで社会還元を行う。

3. 研究の方法

本研究は、過去数年に渡って共同研究を行ってきた研究代表者と4名の分担者に加えて、海外のSLA研究、臨界期、脳科学の研究アドバイザーとの連携のもと、国際的な評価に耐える研究を目指した。この目的達成のために、(1)日本人英語学習者を被験者として、トレーニングを行い、トレーニングの前後で機能的磁気共鳴画像法(fMRI)を用いて、脳機能の変化を測定した。(2)日本人英語学習者の冠詞、時制に関する言語知識の解明を、言語理論と心理行動実験から行った。

4. 研究成果

本研究に関して、国内外で多くの研究発表を行い、論文、著書の執筆を行った。特筆すべきは、海外のインパクトファクターの高い専門誌に研究成果が掲載されたことである。重要な研究成果として以下のものがある。

(1) L1の獲得には個人差がないのに、EFLの獲得には個人差が大きい。この個人差を、脳活動を調べることで、個人差に関与する脳部位を特定した。英語を中学1年から学ぶ場合に、中学校から大学にかけての6年間の学校教育で、英語が定着するにつれて、人間言語の統語処理に関与していると想定される大脳左半球の下前頭回にある「統語中枢」(ブロードマンの45野、BA45)の活動が変化することが明らかになっている(Sakai 2005)。英語を習い始めた中学1年生は、英語の成績が向上するにつれて統語中枢の活動が上昇するが、中学から英語を始め

6年間英語に接触した大学生の場合は、熟達度が高くなるほど統語中枢の活動が減少する。本研究は、英語の学習開始年齢が異なっても、統語中枢に同じような活動の変化が見られるのかを確かめるために実験を行い、学習開始6年を境に統語中枢の活動が節約されていくこと（英語知識が確かなものになり、統語中枢が効率的に使われたために、脳活動が少なくなること）を突きとめた。実験に参加したのは、小学校1年から英語イメージ教育をうけて英語接触期間6年以上の中高校生からなる「長期習得群」と、中学校から英語学習を始めた英語接触期間6年未満の中高校生からなる「短期習得群」である。短期習得群は、2ヶ月間英語の動詞の使用法に関するトレーニングを授業中に行い、実験課題を行っている最中の脳活動を、教授（トレーニング）の前後にfMRIで計測した。トレーニング後の短期習得群の平均成績は、長期習得群の成績と等しいので、両群の相違は、平均成績、年齢からは説明できず、英語に対する接触期間だけとなる。実験結果は、短期習得群では、大脳左半球の下前頭回にある「統語中枢」(BA45)が、成績が良くなるほど活発になるが、長期習得群では成績が高いほど活動が弱くなった。つまり、6年間の英語接触で、統語中枢が効率的に機能するという機能変化が起こることが明らかになった。さらに、文と文の意味的なつながりに特化していると考えられる「文章理解中枢」(BA47)は、長期習得群では反応時間が短いほど脳が活性化しており、逆に短期習得群では反応時間が長いほど活動が活発化していることが分かった。つまり、英語に熟達すると短時間で文章理解中枢を活性化するという機能変化が起こっている。以上の結果は、Sakai (2005) の結果とあわせると、EFLの定着は英語の開始年齢だけでは説明できずに（すなわち、学習開始時期はEFLの熟達度に決定的な影響を及ぼさない）、6年以上の接触が重要であることを示唆している。この結果は、英語力の個人差を、脳科学を用いて定量的に測定したことで、SLAの解明に大きな貢献をすると思われる。研究成果は、国際的なジャーナルである *Human Brain Mapping* に掲載された (Sakai et al. 2009)。

(2) SLAの敏感期(sensitive period) を過ぎたと一般にいわれる日本人大学生が、教授（トレーニング）で新しい文法規則（否定倒置構文）を学んだ時に、脳機能がどのように変化するかをfMRIを用いて調べた。否定倒置に関してトレーニングを受ける教授群と、トレーニングを全く受けない非教授群を統制群として、行動実験および、fMRI計測を行った。この実験では、表層的情報だけでは、構造に依存しているか否かが判別できないような単文のみを用いてトレーニングを行った。その結果、教授群ではトレーニング時に用いた単文のみならず、トレーニングで用いなかった複文も、構造依存性の原理を用い

て処理することが示された。すなわち、トレーニング前に比べてトレーニング後には、トレーニングで用いなかった複文の否定倒置構文に対する文法性判断の成績が向上した（誤答率が下がった）。さらに、複文の否定倒置構文の文法性の判断をするときに、「統語中枢」である左ブローカ野三角部 (BA45) の賦活が新しく見られた。この領域の賦活は、階層性が関与する統語規則を獲得したときの Musso et al. (2003) の結果とも一致する。この結果は、構造依存性の原理（遺伝的要因）と、教授・トレーニング（環境要因）が相まって、L2の敏感期を超えた学習者が、トレーニング以上の統語知識を獲得したと解釈することが可能である。すなわち、「SLAにおけるプラトンの問題」に対して、脳科学からの証拠を提示したことになる。また、この結果は、EFL環境でも母語で機能する生物学的制約が依然として働いていることを脳科学から示唆している。すなわち、人間言語の中心的原理（構造依存性）に関しては、年齢効果がなく、この意味において、母語とL2の言語処理は根本的には異なることになる。教授効果に関する研究は、人工言語を用いた研究が多いが、人工言語学習と自然言語学習は根本的に性質が異なる（遊佐 2012）。さらに、自然言語学習の場合でも、トレーニングで使用したのと同じ文型を刺激文として使用している研究では、トレーニングで学んだことを暗記し、この知識をトレーニング後の実験で使用している可能性を完全には排除できていない。この意味で、この問題を解決した本研究は、教授効果に関して重要な知見を提供している。本実験は、UGの原理に関しては、臨界期が存在しないことを示唆しており、SLAにおける臨界期・敏感期問題に、大きな意味を持つと思われる。研究成果は、国際的なジャーナルである *Journal of Cognitive Neuroscience* に掲載された (Yusa et al. 2011)。

(3) 日本人英語学習者の冠詞獲得に関して、冠詞選択（定性、特定性、総称性）のメカニズムを探った。その結果、定性に加えて特定性に基づいて、冠詞の選択をすることが判明した。「定冠詞+単数名詞」の総称文は、「種 (kind)」を指せるが、この制約は英語特有であり、L2使用者にとっては獲得が困難な知識である。また、冠詞選択、冠詞知覚に関する教授効果を探る実験を行った。冠詞の知覚の方は教授効果が容易に導くことが可能であることが判明した。しかし、冠詞選択は、関与する素性に関する教授を行えば、獲得が容易になると予想されたが、明示的な教授（否定証拠を含む）にもかかわらず教授効果が上がらなかった。これは、日本人英語学習者がメタ言語方略を用い、学習文法から学んだ過度に一般化された知識が宣言的知識となり、冠詞獲得の弊害になる可能性が考えられる（なお、現在も、トレーニングの

方法を変えて、教授効果を探っている)。研究成果は、アメリカ応用言語学会で発表し、UGと教室での教授の関係を扱った書籍として *Universal Grammar and Classroom Instruction* (Springer 発行) に掲載予定である。さらに、2010年度におこなった公開ワークショップ『日本人英語使用者の冠詞習得の問題点』に基づいた、冠詞に関する学習文法書を出版予定である。

明示的教授は、言語運用の向上には役立つことが知られているが、L2知識獲得に効果があるのかどうかは依然として論点として残っている。しかし、日本語、英語に関するメタ言語知識の豊富な日本人英語教師は、英語非母語話者であるにも関わらず、英語母語話者よりも質の高い言語入力を英語学習者に提供し、原理だった説明ができる可能性がある。さらに、生成文法の言語知識の詳細な分析は、学習文法の過度な一般化の限界を知り、また可能性を追求するための基盤となり、学習文法の改善にもつながる。外国語としての英語環境にある我が国では、接触量が限られているために、取り込み可能な言語入力を与えることが重要であり、言語入力とUGとの相互作用で中間言語がL2使用者の脳内に成長することを期待すべきなのかもしれない。この意味で、言語入力を取り込ませるために、言語処理を促進するような入力を提示することの重要性が示唆された。

(4) 時制の獲得に関して、「素性再編成仮説 (Feature Reassembly Hypothesis)」の観点から、日本人学習者の誤りに関するデータを得た。主なものとしては、(a) “*John is often play tennis”におけるBE動詞の過剰生成を扱い、UGの関与と母語の影響から、原理的説明を試みた。研究成果は、論文化を行っている。(b) 主語と動詞の一致に関して “*The key to the doors were ...”に見られる「一致牽引 (agreement attraction)」を扱いデータを得た。従来の研究は、牽引要素である複数形が前置詞句に埋め込まれている時のほうが、関係節に埋め込まれている時よりも (“The key that opened the doors were ...”, 一致牽引が大きいことを発話データから明らかにしていた。本研究で、言語理解においても同様の結果が得られた。このことは、L2使用者が、線形順序にのみ基づいて言語処理するのではなく、構造情報も利用していることを示している。なお研究成果は、2011年度におこなった公開ワークショップ『日本人英語使用者の時制習得の問題点』で社会還元を行った。

(5) インターフェイスと素性の観点から見たSLA研究の新しい姿として、遊佐典昭(2010)『言語と哲学・心理学』(朝倉書店)、Leung and Snape (to appear) *Second Language Acquisition: Second Language* (Palgrave Macmillan)を執筆した。また、2010年日本言

語学会夏季講座で「第二言語習得(初級)」を担当し、本研究の成果を広く紹介した。

結語

SLAを科学的に解明しようとするならば、生物言語学の一部として扱う必要がある(遊佐2011)、言語理論、L1獲得、認知心理学、学習科学、脳科学、神経教育学、哲学等多くの領域が関与する。このように、SLA研究は多岐にわたるが故に、各専門分野での研究のみでは、SLAの本質に関する全体像は見えてこない。Hauser et al. (2002)は、言語機能 (faculty of language, FL)を統語構造を生み出す「狭義のFL」と、言語以外の認知能力を含む「広義のFL」に分けて、狭義のFLこそが人間言語に固有であると主張している。しかし、SLAの全体像を理解するには、狭義のFLの理解だけでは不十分で、広義のFLに含まれる領域汎用的メカニズムや帰納的学習も考慮に入れる必要がある。さらに、SLAにも言語入力が不可欠であるので、言語入力の質とその処理が今後大きな課題となる。ミニマリストプログラムに基づくSLA研究は、研究領域を広げながらも、解決すべき問題を明らかにしている。総力戦で取り組めば、従来とはかなり異なった成果が期待できると思われる。言語の脳科学はまだ緒に就いたばかりであって、この研究が示唆することを、過大評価すべきではないが、過小評価すべきでもない。現在の脳科学は、言語を統語部門、意味部門、音韻部門といった粗い単位で扱う研究が多いが、ミニマリスト・プログラムの素性、併合の概念を持ち込むことで、言語の脳科学は精緻化され、より妥当性の高い仮説を提示できるようになると期待される(遊佐2012)。また、SLA研究は基礎研究であるが、学校文法を改善する可能性のあるデータが数多く存在するので、今後は書籍等を通して社会還元を行う予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計26件)

- ① Yusa, N., Koizumi, M., Kim, J., et al. Second-language instinct and instruction effects: nature and nurture in second-language acquisition. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 査読有、vol.23(10), 2011, 2716-2730.
DOI: 10.1162/jocn.2011.21607
- ② Hidaka, S., Koizumi, M., et al. Effect of second language exposure on brain activity language processing among preschoolers, *Neuroscience Research*, 査読有、2011, vol. 73, 73-79
DOI: 10.1016/j.neures.2012.02.004
- ③ Nasukawa, K. The internal structure of 'r' in Japanese, *Phonological Studies*, 査読有、

- 2011, vol.14, 27-34
- ④ Nasukawa, K. Representing phonology without precedence relations, *English Linguistics*, 査読有、2011, vol.28, 273-34
- ⑤ Yusa, N., Koizumi, M., Kim, J., et al. Unexpected effects of the second language on the first, *Proceedings of the Sixth International Symposium on the Acquisition of Second Language Speech New Sounds 2010*, 査読有、2010, 580-584
- ⑥ Koizumi, M., & Tamaoka, K. Psycholinguistic evidence for the VP-internal subject position in Japanese, *Linguistic Inquiry*, 査読有、vol. 41(4), 2010, 663-680, DOI:10.1162/LING_a_00016
- ⑦ Takahashi, J., Koizumi, M., et al. Effects of non-native language exposure on the semantic processing of native language in preschool children, *Neuroscience Research*, 査読有、2010, vol.69(3), DOI: 10.1016/j.neures.2010.12.003
- ⑧ Nasukawa, K. No consonant-final stems in Japanese verb morphology, *Lingua*, 査読有、2010, vol. 120, 2336-2352, DOI: 10.1016/j.lingua.2010.03.026
- ⑨ Snape, N. & Kupisch, T. Ultimate attainment of second language articles: a case-study of an endstate second language Turkish-English speaker, *Second Language Research*, 査読有、2010, vol.26(4), 527-548, DOI: 10.1177/0267658310377102
- ⑩ Nasukawa, K. Place-dependent VOT in L2 acquisition, *SLRF 2008: selected proceedings of the 2008 Second Language Research Forum*, 査読有、2010, 197-200
- ⑪ Sakai, K.L., Yusa, N. et al. Distinct roles of left inferior frontal regions that explain individual differences in second language acquisition, *Human Brain Mapping*, 査読有、2009, vol.30, 2440-2452, DOI: 10.1002/hbm.20681
- ⑫ Otaki, K and Yusa, N. The Sloppy-identity interpretation in child Japanese: its acquisition and implications, *The Proceedings of the Tenth Tokyo Conference on Psycholinguistics*, 2009. 査読有、193-214
- ⑬ Snape, N. et al. Spanish, Turkish, Japanese and Chinese learners' acquisition of generic reference, *Proceedings of the 10th Generative Approaches to Second Language Acquisition*, 査読有、2009, vol. 10, 1-8
- ⑭ Kupisch T, Neal, S., et al. Article acquisition in English, German, Norwegian and Swedish, *Georgetown University Round Table on Languages and Linguistics (GURT) Proceedings*, 査読有、2009, 223-235
- ⑮ Yokoyama, S., Yusa, N. et al. Left middle temporal deactivation caused by insufficient second language word comprehension by Chinese-Japanese bilinguals, *Journals of Neurolinguistics*, 査読有、2009, vol.22, 476-486, DOI: 0.1016/j.jneuroling.2009.04.002
- ⑯ Kim, J., Koizumi, M., et al. Scrambling effects on the processing of Japanese sentences: an fMRI study, *Journal of Neurolinguistics*, 査読有、2009, vol.22, 151-166, DOI: 10.1016/j.jneuroling.2008.07.005
- [学会発表] (計 52 件)
- ① Yusa, N. Structure dependence in the brain, *EVOLANG IX: Workshop on Language and the Brain*, 2012 年 3 月 13 日、京都キャンパスプラザ
- ② Neal, S. A longitudinal study of 4 returnees: genericity, Work in Progress, 2012 年 3 月 5 日、ハンブルグ大学
- ③ 那須川訓也 英語時制の音韻論、公開ワークショップ日本人英語使用者の時制習得の問題点、2012 年 1 月 21 日、宮城学院女子大学
- ④ Hirakawa, M. & Neal, S. Judgements on tense and aspect by Japanese learners of English, 公開ワークショップ日本人英語使用者の時制習得の問題点、2012 年 1 月 21 日、宮城学院女子大学
- ⑤ Yusa, N. Neuroimaging evidence for the poverty of the stimulus problem in second language acquisition, *50 Years of Linguistics at MIT*, 2011 年 12 月 17 日、マサチューセッツ工科大学
- ⑥ 遊佐典昭 第二言語獲得における個別性と普遍性、日本英文学会第 29 回大会シンポジウム「言語と言語の接点から見る言語知識の普遍性と個別性」、2011 年 11 月 13 日、新潟大学
- ⑦ Hirakawa, M. & Snape, N. Interpretations of tense and aspect in English by Japanese learners, *Second Language Forum*, 2011 年 10 月 15 日、アイオワ大学
- ⑧ 遊佐典昭 言語発達の脳科学-感受性期以降の頭語獲得を中心に、第 36 回関西言語学会シンポジウム「言語発達と脳科学：言語学と脳科学の連携に向けて」、2011 年 6 月 11 日、大阪府立大学
- ⑨ Nasukawa, K. & Backley, P. Contrastiveness: the basis of identity avoidance, *Generative Linguistics in the Old World (GLOW) 34*, 2011 年 5 月 1 日、ウイーン大学
- ⑩ Snape, N., Yusa, N., and Sakaguchi, Y. Article instruction: do empirical findings from L2 research aid L2 learners? *American Association for Applied Linguistics Annual*

- Conference, 2011年3月29日, シカゴ
- ⑪ Nasukawa, K., Yusa, N., & Koizumi, M. VOT improvement and place of articulation in L2 acquisition, *The 15th English in Southeast Asia Conference*, 2010年12月9日、マカオ大学
- ⑫ 那須川訓也、英語冠詞の音韻論、公開ワークショップ 日本人英語使用者の冠詞習得の問題点、2010年10月30日、宮城学院女子大学
- ⑬ Snape, N. Perception of articles by L1-Japanese L2-English learners, 公開ワークショップ 日本人英語使用者の冠詞習得の問題点、2010年10月30日、宮城学院女子大学
- ⑭ Utsugi, A., Koizumi, M., & Mazuka, R. A robust method to detect dialectal differences in perception of lexical pitch accent, *20th International Congress on Acoustics*, 2010年8月23日、シドニー
- ⑮ Yusa, N., Koizumi, M., Kim, J., et al. The impact of social interaction on post-puberty second language acquisition of syntax, *Human Brain Mapping*, 2010年6月9日、バルセロナ
- ⑯ Otaki, K., & Yusa, N. Quantificational null objects in child Japanese, *The 5th Formal Approaches to Japanese Linguistics Conference*, 2010年5月7日、カリフォルニア大学サンタクルーズ校
- ⑰ Yusa, N., Nasukawa, K., Koizumi, M., et al. Unexpected effects of the second language on the first language, *The 6th International Conference of Second Language Speech: New Sounds 2010*, アダムマッケンジー大学 (ポーランド)
- ⑱ Snape, N. Research on English article acquisition: implications for EFL/ESL teaching practice, *American Associations of Applied Linguistics*, 2010年3月6日、アトランタ
- ⑲ Koizumi, M. Experimental syntax: what we can expect? 第27回日本英語学会, 2009年11月15日、大阪大学
- ⑳ Snape, N. & Hosoi, H. L1 Japanese/L2 English acquisition of scalar implicatures, 第9回日本第二言語習得学会, 2009年5月31日、中央大学

[図書] (計 19 件)

- ① Leung-Y-k. I. & Snape, N. Palgrave Macmillan, *Second Language Acquisition: Second Language Systems*, 印刷中
- ② Snape, N. & Yusa, N. Springer,

(Whong, M. et al. eds) *Universal Grammar and the Second Language Classroom*、印刷中

- ③ 遊佐典昭、開拓社、(藤田耕司他編) 最新言語理論を英語教育に活用する、2012、485(336-347)
- ④ 遊佐典昭、開拓社、(遊佐典昭他編) 英語教育学大系第5巻 第二習得研究、2012、302(109-117)
- ⑤ 遊佐典昭、開拓社、ことばと心の探究、2012、424(61-74)
- ⑥ 遊佐典昭、朝倉書店、(遊佐典昭編) 言語と哲学・心理学、2011、281(1-8, 193-218, 269-275)
- ⑦ 孫猛・小泉政利、くろしお出版、(景山太郎他編) 日中理論言語学の新展望1 統語構造、2011、228(85-107)
- ⑧ 小泉政利、オーム社、(村上郁也編) イラストレクチャー認知神経科学、2010、288(89-106)
- ⑨ Nasukawa, K. Continuum, (Nasukawa, K. et al. eds.) *The Continuum Companion to Phonology*, 2010, 524(33-63)
- ⑩ 遊佐典昭、ミネルヴァ出版、(大津由紀雄編) はじめて学ぶ言語学、2009、336(231-250)
- ⑪ 小泉政利、くろしお出版、(由本陽子他編) 語彙の意味と文法、2009、544(85-97)
- ⑫ Snape, N. Leung, Y-k. & Sharwood, M., John Benjamins, (Neal, S. et al. eds.) *Representational Deficits in SLA: studies in honor of Roger Hawkins*, 250 (27-51)
- ⑬ 金情浩、ひつじ書房、(佐藤滋他編) 言語・脳・認知: 科学と言語習得、2009、204(85-97)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

遊佐 典昭 (YUSA NORIAKI)
宮城学院女子大学・学芸学部・教授
研究者番号: 40182670

(2) 研究分担者

小泉 政利 (KOIZUMI MASATOSHI)
東北大学・文学研究科・准教授
研究者番号: 10275597

那須川 訓也 (NASUKAWA KUNIYA)
東北学院大学・文学部・教授
研究者番号: 80254811

金 情浩 (KIM JUNGHO)
東北大学・文学研究科・助教
研究者番号: 70513852

ニール スネイプ (SNAPE NEAL)
群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・准教授
研究者番号: 10463720